

Ikiiki  
Maebashi  
Jin



シティマラソンボランティア  
並木 陽子さん・63歳  
大渡町二丁目

## 安心して走ってほしい

前橋・渋川シティマラソンの運営には多くのボランティアが関わっている。並木さんもその一人で、第1回大会から毎回、ボランティアとして参加している。

「誰かの役に立てることがあるなら、力になりたいと思ってボランティアに参加しました。これからもできる限り続けていきたいです」

前橋・渋川シティマラソンは赤城の山並みを感じながら走ることができることも魅力のひとつ。

「コースからは赤城山がずっと見えます。景色がきれいで気持ちよく走れたと参加者に喜んでもらえます」  
毎年、大会が安全に開催さ

れているのはボランティアの協力が大きい。

「去年、脱水症状を起こした参加者がいたので、すぐに気付き救護を呼びました。長距離を走るの何があるか分かりません。コースも一本道ではないので、参加者が迷子にならないよう、みんな注意しています」

今月20日(金)から第3回大会の申し込み受け付けが始まる。

「参加者の皆さんに、ことしもマラソンに集中できた、安心して走れたと思ってもらえる大会にしたいですね」

今回のシティマラソンも並木さんたちボランティアの活躍で、参加者の思い出に残る大会になるだろう。



## 多彩な催しを満喫

10月31日から11月3日まで、児童文化センター秋まつりを開催しました。各種体験教室などの他、最終日のオータムコンサートでは昨年度「市民のうた」で市長賞を受賞した木村ユタカさんと合唱団とのコラボレーションも。参加者は盛りだくさんのイベントを満喫していました。



この連載では、市民に寄稿してもらい、さまざまな角度でアーツ前橋を紹介します。第15回は、建築家の橋本薫さんです。

## 「棲む」ことを見つめ直して

橋本 薫さん・38歳

現在開催中の展覧会「ここに棲む―地域社会へのまなざし」は建築家の実践をとおして「棲む」ことについてあらためて考える展覧会です。

「住む」場所は先祖や家族、仕事などさまざまな要因によって決まり、動物的感覚で「棲む」場所を決めることは少ないのではないのでしょうか。

前橋は都会のような刺激を得ることこそできませんが、空気や空の大きさ、おらかな時間の流れ、食の豊かさ、

適度な距離感など、「棲む」場所としては好条件ばかりです。

中心市街地はその好条件を楽しめる居心地の良い場所に変わってきているように感じます。それに大きく貢献しているのがアーツ前橋の存在。館長や学芸員は前橋のことを驚くほど良く知っています。開館前から丁寧に市民と対話し、市民の活動を後押ししたことが、現在のまちなかの居心地を生み出しているのだと感じています。

私は生まれてからずっと前橋に住んでいます。これまで自分の「棲む」場所について考えたことはありません。なかで開催されることを市民として誇りに思います。ぜひこの機会に時間をかけてまちなかを散歩してみてください。

問い合わせは  
アーツ前橋 ☎027-230-1144



## 言葉が織り成す世界を堪能

10月31日、前橋文学館で萩原朔太郎賞の贈呈式を開催。受賞者の川田絢音さんへ朔太郎の胸像などを贈呈しました。さらに、小鼓と箏に合わせた朔太郎の郷土望景詩の朗読や、川田さん自身による受賞作「雁の世」の朗読と解説などが行われました。



## 電車の乗り方を学びました

6月から10月にかけて、市内13校約600人の小2児童が参加して鉄道乗り方学習を実施しました。駅員などから説明を受ける児童は緊張感と好奇心が混ざった面持ち。鉄道の利用方法やマナーを身に付けるとともに、公共交通の役割と重要性を学習しました。